

一 次の文章を読んで、後の問い(問1～13)に答えよ。(配点 75)

甲

近年生まれしてきたグローバル化現象は、好むと好まざるとにかかわらず今後も急速に進むだろう。地球規模の均質な市場ができあがるのか、そのような市場形成に対して大規模な反撃が生まれるのかは不明だ。しかし、多文化間の接触、特に異なった宗教的伝統が、近い将来<sup>A</sup>これまでに<sup>A</sup>は見られなかった激しきでぶつかり合うことは確実であり、その激突はすでに起きている。

おのおのの宗教が「聖なるもの」と考える神、世界の根本原理、悟りなどの内容は、数千年にわたる伝統の相違を反映しており、短期間の対話によってその相違の溝は埋められそうもない。しかし、これからの社会は、文化、宗教の相互理解の上にか成り立つものではないことも確かなのだ。われわれ日本人は、自らの文化的伝統を他の文化の人々に向かって、精緻な言葉によって説明するという伝統を養ってこなかった。論理的な言葉を積み重ねてセイゴウテキな理論体系を構築するといった方向には進んでこなかった。例えば、能、茶道、華道、俳句といった伝統文化には、言葉を精緻にして積み重ねていくというよりも、言葉を可能な限り削りとり、最後には言葉がなくなつた境地の中に文化の精髓を見ようとする傾向が確かにある。そのようなものとしてそれらは日本文化を代表してきたし、外国においても理解者を得てきた。だが、これからの世代においてそのような態度は続けられないであろう。インド的あるいはヨーロッパ的な世界の人たちの多数に自分たちの立場を説明するためには、これまでのように言葉をつかわない方法ではなくて、言葉を精緻にして一つ一つ論じて積み重ねていく態度こそが<sup>B</sup>必要なのだ。もちろん新しく世界史の同一舞台に参加してきた地域の人々に対しても。

仏教が日本文化を支えている重要な柱の一つであることに疑いはない。仏教にはさまざまな思想の流れがあるが、それらのうち、最も重要なもののひとつが空<sup>くう</sup>の思想である。空とは究極的に言葉を超えた境地を目指しているがゆえに、空の思想を体系的な言葉によって説明することは非常に難しい。にもかかわらずインドの仏教思想家たちは、空を可能な限り言葉によって説明しようと努力した。だが、日本においては空の思想を理論によって説明することを諦めてきたかのように見える。このような態度は今後変わらざるをえないだろう。

### 世界観／目的／手段——行為の三要素

では「空」の立場をどのように説明できるのか。その説明のためにはどのような方法を採用すべきなのか。その方法として適切な「窓」を設定することが<sup>I</sup>であろう。空思想の考察および理解のための「窓」として、わたしは行為を選ぼうと思う。

行為には三つの要素、すなわち、(一)世界観、(二)目的、(三)手段がある。行為には常に、行為をする場としての世界に関する知、その行為が目指す目的、そしてその目的を達成するための手段という三要素が見られる。現実の世界において宗教は常にそのような行為形態として現れる。それぞれの宗教はその世界観に基づいて目的を設定し、それを得るために実践形態なり方法を選択してきた。

例えば、イスラム教にはさまざまな派があるが、一般的にこの宗教が人々に命ずるのは社会の律

法を遵守することである。『コーラン』が定める社会の律法を守ることがイスラム教徒に課せられるが、この律法を守ることはイスラム教が求める「平和」を築くための手段である。

イスラム教にあつては個人の精神的な救済は最重要課題ではない。中にはスーフィズムのように個人の精神的救済を追求する傾向の強い派も存在する。しかし、イスラム教全体の中ではこのスーフィズムは異端視されており、スーフィズムの運動が台頭してくるたびに、国家はそれを抑えようとしてきた。現在、例えばイランではこのスーフィズムの伝統が残っているが、国家はスーフィズムの台頭には非常に神経質だ。

一方、キリスト教にあつては、それぞれの信徒が「二本の手」を持っているといえよう。一本は個人的な精神的な救済に、もう一方は社会的規範の方にのびている。個人の精神的救済のみではなく、自分の属するコミュニティーの運命を仲間とともに考えるといった意識が、キリスト教徒には非常に鮮明である。キリスト教徒にとつては教会をどのように考えるかが重要だ。教会をキリストの体と考えるか、キリストが降りたもうた場所と考えるか、歴史的には教会をめぐってさまざまな解釈が生まれてきた。というのは、キリスト教は信仰を同じくする仲間たちが集う教会を核として世界を認識するからだ。教会に属することによってキリスト教徒たちは、仲間とともに神に向き合っていることを心に刻むのである。

ヒンドゥー教も、キリスト教と同じように二本の手を持っている。しかし、ヒンドゥー教の場合にはその二本の手は別々の個体に見られる。つまり、それぞれの家族の家長たちは社会を維持していくための手を、一方、出家者たちは個人の精神的救済をつかもうとする手を持っているのである。もつとも、近代のヒンドゥー教では例えばヴィヴェーカーナンドの思想に見られるように、一人の人間が「二本の手」を意識的に持つようになってきたのであるが。

チベット、日本の仏教などではまた別の状況が生まれてくるが、仏教のゲンセキ地インドでは、仏教は基本的に個人の精神的至福にかかわる手しか持っていない。仏教は元来、個人の精神的な至福を追求する型の宗教であつて、社会的な規範を遵守することを第一義としたものではなかった。したがつて、仏教は少なくともインドにおいては、家族や地域社会を捨てた修行者の集団を核として伝えられてきた。仏教僧たちは教団に属したのであるが、その教団は主として個人的精神的な救済を求める者たちの集まりであつて、キリスト教の教会のような社会的機能を果たすものではなかった。精神的至福という個人的宗教行為の目的達成を目指すのか、社会的な統制・規範の実現を集団的宗教行為の目的とするのか、あるいは双方の要素をあわせもつのが、まず宗教の型を決定する。

## 乙

空の思想が現実には歴史の中で機能するときには、それは行為として現れる。行為であるからには、そこには先述の三要素すなわち世界観、目的、および手段が存在する。では、空の思想はどのような世界観に基き、どのような目的のための、どのような実践形態を提供してきたのか。そのような世界観に基き目標に向かって実践した場合、どのような結果が得られるのであろうか。

空思想が踏まえている世界観について、他宗教の人々と語るときに問題となるのが、神の存在である。空思想にあつては原則的に神あるいは絶対者は存在しない。仏教、特に真宗の信仰について

キリスト教徒と話す場合、「あなたは阿弥陀仏が存在すると考えるのか、しないと考えるのか」という質問をしばしば受ける。キリスト教の信者にとって神が存在するということは当然だ。神が存在しないといえればキリスト教徒ではなくなるであろう。ところが、仏教徒にとって厳密な意味では「阿弥陀は存在する」とも「存在しない」ともいうことはできない。そもそも仏教徒にとっては神ならずともどのようなものも存在するとか、しないというような判断を下すこと自体が究極的な意味では間違いないのである。しかし、キリスト教徒からは「存在するともしないともいえない、ではそれは何なのか」と問われる。結局、双方共に相手の方が「よく分かっている」という思いを抱くだけに終わってしまう。

「神あるいは根本原理が存在するとはいえない」といった仏教の世界観は、キリスト教徒やイスラム教徒にはすこぶる分かり難いものであるようだ。空の思想では **II** に世界も空である、つまり存在しないという。これは世界観そのものを必要としないといっていることに等しい。だが、後に見るように空の思想はただ単に「神も存在しなければ、世界も存在しない」と言っているわけではない。空に至った後に世界がよみがえり、悟りなどの精神的救済も成立すると主張するのである。

「色形あるもの(色)は空(空性)であり、空は色形あるものだ」(色即是空、空即是色)と有名な大乘経典『般若心経』はんにやしんぎょうはいう。ここでは色形あるもの、すなわち現象世界が空なるもの(あるいは空なること)であるといわれ、現象世界の実在性が否定されている。また空なることは色形あるものであるといわれて現象世界の存立が肯定されてもいる。このように空の思想は何ものも存在しないとのみいっているのではなくて、否定の結果として何ものかがよみがえるといことを主張しようとしている。この否定の後に続く肯定が空思想の求めるものであり、さらにこの否定に続く肯定が空思想の実践の内容にかかわるのである。

### 空と自己否定

ソクラテス、孔子、イエス、仏陀は、同じような時期に出生している。これは宗教史にとって重要な出来事である。ドイツの哲学者カール・ヤスパース(一八八三―一九六九)は、この四人が出た時代を「軸の時代」と名付けた。彼らの思想に共通していることは、個々の人間つまり自己を問題にすることだ。「軸の時代」までは、王が国を守るための儀式であるとか、人々がその社会を守るための律法であるとかが宗教の名において求められてきた。今のわれわれならば自己を問題にすることは当然ではないかと思う。しかし歴史の中においては、個人の精神の問題が考えられるのはそれほど古いことではない。古代エジプトの宗教、セム系ユダヤ人の宗教、古代日本における豪族たちの宗教などにあつては、王あるいは皇帝の死後の世界をどのように考えるかが主要問題となることはあつても、一般の人間が個体として浮かび上がることはなかった。

しかし、セム系の宗教であるユダヤ教的伝統の中から生まれたキリスト教においては事情が異なっていた。イエスが死刑にならねばならぬほど、イエスの宗教は新しかった。何が新しかったのか。個々の人間に「悔い改めよ」といったこと、すなわち個々の人間に自己否定を求めたことだ。彼以前のユダヤ社会においては律法に従って社会的規範を守り、そこからイツダツシないかぎり人は異端者とは見なされなかった。だが、イエスはそれまでの律法主義者たち、伝統的なパリサイ人

たちに対して「あなたたちは真の自己を考えていない」と批判した。つまり、イエスは個々の人間の魂を問題にしたのである。

古代インドのヴェーダの儀式にあっては、どのような儀礼をすれば死後天国へいくことができるかというようなことが重要であった。貯金通帳のようなものが天のどこかにあって、これだけ大掛かりな祭式のパトロン(注)になり、これだけのクドクを積んだことが記帳されれば天国へいくことができると考えられていた。それゆえ、王族たちは大掛かりな儀式の執行をバラモン僧たちに依頼したのである。

これとは対照的に、釈迦は個々の人間にかかわった。釈迦が問題にしたのは、病を得て老いて死んでいかなければならない個々の人間の精神だった。インド古代史の中で歴史上の人物のギョウジョウfがあれば鮮明に、個人の生涯を通じて浮かび上がるのは、釈迦の場合のみだ。二千数百年もの昔に生きた釈迦の生涯はまことにシヨウサイgに記録されている。これは仏教という宗教が

ア

ことの一つの証拠なのである。このように、「軸の時代」以降個人的な精神的救済が、今日わたしたちが世界宗教と呼んでいる形態の中で追求されてきた。

「軸の時代」の巨人たちは、自己否定を通じて精神的な救済という目的を追求する個々の人間を考えた。「空」の思想は、その流れの中から生まれたのである。

立川武蔵「空の思想史」(講談社 2003年)

(注) パトロン…支援者。

※ 問題作成にあたり、本文を一部改変した。

問1 傍線部 a、g のカタカナは漢字に、漢字はひらがなに直せ。解答は、解答题紙の所定欄に読みやすいはつきりした楷書体で書くこと。解答番号は 1、7。

a セイゴウテキ

1

b 遵守

2

c ゲンセキ

3

d イツダツ

4

e クドク

5

f ギョウジヨウ

6

g ショウサイ

7

問2 空欄

I

II

からそれぞれ一つ選べ。空欄Iの解答番号は8、空欄IIの解答番号は9。

- ① 主観的
- ② 実験的
- ③ 仮想的
- ④ 経験的
- ⑤ 最終的
- ⑥ 客観的
- ⑦ 皮相的
- ⑧ 空想的
- ⑨ 効果的

問3

空欄

ア

一つ選べ。解答番号は10。

に入るものとして最も適当なものを、次の①～⑧のうちから

- ① インドの宗教史で輝いた
- ② 社会的規範を尊んできた
- ③ 精神的至福を客観視する
- ④ 釈迦の精神性を重視する
- ⑤ インド古代史に定着した
- ⑥ インドで唯一無二である
- ⑦ 個というものを見据えた
- ⑧ 釈迦の人間性に依存した

問4

傍線部A「これまでには見られなかった」から意味の最も遠いものを、次の①～⑧のうちから一つ選べ。解答番号は11。

- ① 希代
- ② 空前
- ③ 無先例
- ④ 不見識
- ⑤ 未曾有
- ⑥ 前代未聞
- ⑦ 前例のない
- ⑧ 未だ曾てない



問5 傍線部B「そのような態度は続けられない」の理由として最も適当なものを、次の①～⑥のうちから一つ選べ。解答番号は 12。

- ① 異なった宗教的伝統の激突がすでに起きている世界にあって、文化や宗教の相互理解を深めていくに当たり日本が主導的な役割を果たすためには、言葉を精緻にして一つ一つ論じて積み重ねていく態度が必要だから。
- ② 言葉を可能な限り削りとり、最後には言葉がなくなった境地の中に文化の精髓を見ようとする日本の伝統文化の傾向は、他国の人たちからいっさい理解されることなく今日に至っているから。
- ③ 近年生まれしてきたグローバル化現象が急速に進んでいくとみられる中で、文化、宗教の相互理解を深め世界文化を一体化していくためには、論理的な言葉を積み重ねることで理論体系を構築する態度を採ろうとはしない現状を改めていく必要があるから。
- ④ インド的、ヨーロッパ的を問わず世界史の同一舞台に参加してきた地域の人々と文化的に連携していくためには、言葉を可能な限り削りとっていく態度では心もとなく、論理的な言葉を精緻に積み重ねていく態度が求められるから。
- ⑤ 文化、宗教の相互理解の上にしか成り立たないこれからの国際社会においては、言葉を精緻にして一つ一つ論じて積み重ねていかないと、他の文化の人々に日本の立場が正確に伝わらないことになるから。
- ⑥ インド的あるいはヨーロッパ的な世界の人たちの多数に日本の伝統文化の精髓を理解してもらうためには、言葉を精緻にして一つ一つ論じて積み重ねていく態度を採る必要があるが、それに相応した文化的能力が日本人には欠けているから。

問6 傍線部C「キリスト教徒にとっては教会をどのように考えるかが重要だ」の理由として最も適当なものを、次の①～⑥のうちから一つ選べ。解答番号は 13。

- ① キリスト教徒は個人的な精神的な救済と社会的規範の双方を重視する中で、個人の精神的救済よりも自分の属するコミュニティとしての教会の運命を強く意識しているから。
- ② キリスト教徒たちは、教会に属することにより仲間とともに神に向き合っていることを心に刻み、教会を核として世界を認識するから。
- ③ キリスト教徒はイスラム教徒と同じく個人の精神的な救済のみならず社会的規範を重視しており、信仰を同じくする仲間たちが集う教会を核として世界を認識するから。
- ④ キリスト教徒にとっては教会をキリストの体と考えるか、キリストが降臨した場所と考えるかを議論することが信仰を深めることにつながるから。
- ⑤ キリスト教徒たちは、教会に属することによって仲間とともに神に向き合っていることを心に刻み、個人の精神的救済よりも社会的規範を重んじるから。
- ⑥ キリスト教徒は信仰を同じくする仲間たちが集う教会を核として世界を認識することにより、自分の属するコミュニティの運命を決める場として教会に通っているから。

問7 傍線部D「宗教の型」の例として最も適当なものを、次の①～⑥のうちから一つ選べ。解

答番号は

14

- ① 仏教は社会的な規範を遵守するよりも個人の精神的な至福を追求する型の宗教であり、個人の精神的な救済を求める者たちが家族や地域社会を捨てることにより教団の核を形成したことで、インド、チベット、日本において普及することになった。
- ② キリスト教は各信徒が個人的な精神的な救済と社会的規範の双方の手を持ち、教会をめぐるさまざまな解釈を生み出すことにより宗派的対立を鮮明にしながら、その世界観を今日まで広めてきた。
- ③ 個人の精神的救済と社会的規範の二本の手を持つ点がキリスト教と共通するヒンドゥー教においては、家族の家長たちが社会的規範を守り、一方、出家者たちが個人の精神的救済をつかもうとすることにより、今日まで一貫して両者の間で役割分担がはかられてきた。
- ④ 現実の世界において宗教は世界観、目的、手段という三要素に基づき行為をしてきたが、精神的至福という個人的宗教行為の目的達成を目指すのか、社会的な統制・規範の実現を集団的宗教行為の目的とするのかをめぐって、宗教間の対立が激化してきた。
- ⑤ イスラム教におけるスーフィズム、ヒンドゥー教におけるヴィヴェーカーナンダの思想、仏教におけるチベットや日本の宗派というように世界の各宗教は宗派内に異端派を生み出しながら今日まで発展してきている。
- ⑥ イスラム教全体の中では個人の精神的救済を追求する傾向の強いスーフィズムは異端視され、基本的にイスラム教では個人の精神的救済は最重要課題ではなく、社会の律法を遵守することが教徒に課せられている。

問8 傍線部E「他宗教の人々と語るときに問題となる」の理由として最も適当なものを、次の

①～⑥のうちから一つ選べ。解答番号は

15。

① 神だけでなくどのようなものについても存否の判断を下すこと自体が究極的な意味で間違いとなる仏教徒と、神が存在することが当然であるとする他教徒の双方が、絶対者の存在に関する相手側の説明に対して納得するのは困難であるから。

② 神が存在しないといえは教徒ではなくなってしまうキリスト教徒に対し、神の存在のみならず世界観そのものを必要としない空思想を有する仏教は、行為の三要素を持っていない点で宗教としての要件を満たしていないから。

③ 神あるいは根本原理が存在するとはいえないという仏教の世界観は、個人の精神的な救済を最重要課題とするキリスト教徒やイスラム教徒といった他教徒にはすこぶる分かり難いものであり、思想的に相容れないものであるから。

④ キリスト教徒にとって阿弥陀仏が存在することは当然であるにもかかわらず、当の仏教徒が阿弥陀仏は存在するとも存在しないともいうことができないとするのは、キリスト教徒の理解を超えているから。

⑤ 神が存在するということが当然であるキリスト教徒にとって、阿弥陀仏は存在するとも存在しないともいえないとする仏教の世界観は、個人の精神的救済という宗教の目的に応えるものになっていないから。

⑥ 仏教徒にとって神に相当する阿弥陀仏について、仏教徒自身がその存在を明確に認めない態度を採ることは、神が存在しないといえは教徒ではなくなってしまうキリスト教徒には、理解し難いことであるから。

問9 傍線部F「この否定の後に続く肯定」の説明として最も適当なものを、次の①～⑥のうち

から一つ選べ。解答番号は

16。

- ① 世界は二重否定されることによって初めてその存在が肯定されるということ。
- ② 悟りの境地を否定することによって初めて精神的救済は成立するということ。
- ③ 色形あるものは否定されることによりその色の鮮明さが一層増すということ。
- ④ 現象世界の実在性が否定されることにより何ものかがよみがえるということ。
- ⑤ 現象世界の実在性が否定されない限りは世界の存立は継続しないということ。
- ⑥ 何ものかがよみがえるためには否定を肯定することが必要であるということ。



問10

傍線部G「事情が異なっていた」の説明として最も適当なものを、次の①～⑥のうちから一つ選べ。解答番号は 17。

- ① セム系ユダヤ人の宗教が重視した社会を守るための律法を否定し、個々の人間に悔い改めることを求めたということ。
- ② セム系の宗教であるユダヤ教が取り扱ってきた自己の問題に関し、個々の人間に自己否定を求めたということ。
- ③ ユダヤの律法主義者たちの間では問題にされることがなかった個々の人間の精神を、問題にしたということ。
- ④ 「軸の時代」までの宗教ではいつさい死刑になることのなかった教祖を、敢えて死刑に処したということ。
- ⑤ ユダヤ教が全く顧みなかった一般の人間に対して自己否定を求めることで、社会的規範を守らせたということ。
- ⑥ 「軸の時代」までの宗教には見られない新しさを追求することにより、個々の人間を否定したということ。

問11 空欄

甲

から一つ選べ。解答番号は

18

に入る小見出しとして最も適当なものを、次の①～⑧のうち

- ① 文化の精髓
- ② 文化的伝統
- ③ 空思想の髄
- ④ 均質な市場
- ⑤ 思想の流れ
- ⑥ 諦めの理論
- ⑦ 宗教の激突
- ⑧ グローバル

問12

空欄

乙

から一つ選べ。解答番号は

19

に入る小見出しとして最も適当なものを、次の①～⑧のうち

- ① キリスト教徒との対話
- ② 絶対者としての神と仏
- ③ 精神的救済は成立する
- ④ 仏教の世界観の空虚さ
- ⑤ 現象世界の实在性とは
- ⑥ 他宗教の人々との対話
- ⑦ 神も世界も存在しない
- ⑧ 空の思想が求める否定

問13

本文の内容に合致するものを、次の①～⑨のうちから二つ、選べ。ただし、二つとも正解しなければ点を与えない。解答の順序は問わない。解答番号は

20

21

- ① イスラム教全体の中では個人の精神的救済を追求する傾向の強いスーフィズムは異端視されており、このスーフィズムの伝統が残っているイラクでは、国家はスーフィズムの台頭に非常に神経質であり、これが台頭してくるたびに抑えようとしてきた。
- ② 日本文化を支える重要な柱の一つである仏教の思想のうち、最も重要なものの一つである空の思想は、ヤスパースが「軸の時代」と名付けた時代において、自己否定を通じ精神的な救済という目的を追求する個々の人間が考えられていく流れの中から生まれた思想である。
- ③ 行為には常に、行為をする場としての世界に関する知、その行為が目指す目的、その目的を達成するための手段という三要素が見られ、キリスト教においては個人の精神的な救済という行為が最も重要な行為形態として考えられてきた。
- ④ 近年生まれてきたグローバル化現象は、今後も急速に進んでいくものと見込まれ、その結果できあがった地球規模の均質な市場を通じて、異なった宗教的伝統が近い将来これまでになかった激しさでぶつかり合うことは確実であり、その激突はすでに起きている。
- ⑤ 古代インドで王族たちが大掛かりな儀式の執行をバラモン僧たちに依頼した理由は、ヴェーダの祭式にあつては、大掛かりな祭式のパトロンになることをどれだけ積み重ねていくかということが天国へいけるかということに関係していると考えられていたからである。
- ⑥ 日本人は自らの文化的伝統を他の文化の人々に向かって、精緻な言葉によって説明するという伝統を養ってこなかったため、空の思想を展開させることにおいてインドの仏教思想家たちの後塵こうじんを拝することとなった。
- ⑦ 有名な大乘経典『般若心経』に出てくる「色即是空、空即是色」とは、現象世界の实在性を否定するとともに現象世界の存立を肯定する言葉であり、「神も存在しなければ、世界も存在しない」という世界観の対極にある考え方である。
- ⑧ イエスも釈迦も個々の人間にかかわった点で共通しているが、後者が病を得て老いて死んでいかなければならない個々の人間の精神を問題にしたのに対し、前者は真の自己を考えていない律法主義者たちの精神的救済を問題にした。
- ⑨ 世界の各宗教が「聖なるもの」と考える神、世界の根本原理、悟りなどの内容は、数千年にわたる伝統の相違を反映しており、短期間の対話によってその相違の溝は埋められそうもなく、これからの社会は、文化、宗教の相互理解だけでは成り立たないものである。

二

次の文章を読んで、後の問い(問1～11)に答えよ。(配点 75)

デパート文化の主役が現在に至るまで女性であることに異論はないであろう。女性と消費が結びつけられる御馴染みの光景は、PR誌でも繰り返し見ることが出来る。

区画の別になつた大広間の入口に寄せ売場と記して有るマア見た計でゾツとする二千居やうか三千居やうか甚だ希に帽子冠つて男を見るのみ只だザッゼンたる女の塊りで紫陽花の花が風に吹かれて揺れる如くである(『時好』明治三九・一一)

しかし、デパートの出発点となつた呉服店の商品が女性向きだからというのは、その理由としては単純すぎる。グラビアに載る商品の数からいえば圧倒的に女性向きの呉服の新柄が多いとはいへ、男性向きのそれが無いわけではない。また、グラビアから記事本文に目を転じるならば、洋服を勧める記事のほとんどは男性向けのものである。ジャンルの別を考えるならば、ファッションが女性の占有とは決して言えないのである。

確かに、いったん閉鎖されていた洋服部は明治三九(一九〇六)年一〇月と遅れて再開され、ファッションの需要者が女性から男性に拡大したようにも見えるのだが、グラビアが人目を惹く効果を最優先する以上、女性の呉服にしたところで、そこに載る高価な呉服が、実際に売られているのばかりとは限らない。これらの男性用洋服紹介の記事には、スタイル画が必ずのせられており、グラビアには呉服の柄だけが平面的に並んでいることからすれば、人体を美しく撮影・印刷するところまで達していなかったこの時期のグラビア技術が、形を流行の重要な要素とする洋服を載せることを嫌い、グラビアとスタイル画の住み分けを要求したと考えられる。グラビアでの女性向け商品の多さが、買い手が女性であるという事実<sup>A</sup>に直接結びつくことはない。

しかも雑誌の初期には、消費者としての女性は登場しない。むしろ自分で代金を支払ったりせずとも、三井で買物できた上流階級の女性は実際にはいたはずである。しかしPR誌にみられる女性と呉服との縁の深さは、呉服を仕立てる裁縫が女性の仕事である、という関係に尽きる。日露戦時下という事情も考慮しなくてはならないが、明治三八年ごろまでのPR誌の小説や記事に見ることが出来るのは、出征した夫の留守宅を裁縫の賃仕事をして守る妻の姿、つまり労働者としての女性であり、消費者としての女性ではないのである。にもかかわらず、なぜ女性が消費の主役として名指されてしまうのか、その経緯こそが見るべき問題である。

女性と消費の結びつきは、デパートの起源が女性向きの商売である呉服店だから、とか、実際に買物をするのが女性だったから、という実体的な理由とは無関係であり、それらは逆に消費のイメージの浸透とともに起こってることがわかる。とすれば、それをもたらす消費形態の変化がいかに表象されているかを確認しなくてはならない。

呉服屋といふはおもしろい商売だ。御客さんの金で自分の好きな物を拵へる事の出来る商売は余処にはあるまい。元禄模様の流行る時には元禄模様が昨今流行るから御拵ひなさいといふ。そんならお前に任せると仰しやる。自分の思ふ通りにやる。出来上る。素晴らしい奇麗なもの

出来る。嬉しいといつてこんなうれしき事はない。(中略) 自分はお客様の為めをのみ計つて居るのだ。自分の事などは顧みる暇もない、お客さまがあればこそお店もあるのだ。(白鼠生「我輩は呉服屋である」『時好』明治四〇・一一)

一見、店員が商売の論理の赴くままに客をホシロウしているかのような書出しだが、実はそうすることがお客様を最も満足させることであり、お客様の望むものが店員の望むものであると示している。以後デパートが全面に押し出していく〈客の身になる〉サービスである。店員は客と対峙するものではないという安心感のもと、客はデパートの戦略を受け入れるようになるであろう。こうした変化をもたらすのは、店員の実質的变化とばかりは言い切れない。実際に店員に接すれば「全く客の為を思はず、眼前の利益にシウウチャクして居る」(泉鏡花「三越趣味に就て」〔談話〕『太陽』明治四二・四) というような不満も出てくるからである。とすれば実は店員がない(ように見える) ことこそが最も効果的な幻想のふりまき方に違いない。

(注三)

いうまでもなく、商品を陳列する販売方式の変化と、それに伴う現金正札附のサービスである。客が店員に干渉されることなく商品を眺められるサービスは、店内から客と店員が値段を交渉する戦いもイッソウする。店員と客との間に設けられた距離こそが、店に買わされているのではなく、自ら買う買い物客に保証する。もちろん裏を返せば、客は安心感に酔いしれ、デパートがふりまく幻想に簡単に引つかかるといってもある。自ら買う消費者は受動化するのである。そして、この受動化こそが消費者と女性ジェンダーを結びつける。男性支配的な社会のなかでは、受動性とは女性に許されている行動規範だからである。消費がだれにでも許されているというイメージが浸透する時点にこそ消費者と女性を結びつける転換点があるのである。

そしてファッション(一般的には社会、経済、美意識にかかわる行動様式を指す語だが、ここでは衣服や身体装飾を指すキョウウギで使用する)の都合のよさは、こうした消費の受動化の妥当性を具体的に説明できるところにある。この時期、流行にのつとつた衣服を身にまとうことが、経済性や衛生性を説くさまざまな擬似科学的言説によって勧められることになるが、そのなかでもとりわけヒンパンに登場するキーワードが〈色の調和〉である。この点に、なぜほかの領域ではなく、ファッションがまず女性と結んだ近代的消費の主領域となり、同じく陳列販売をした勸工場などではなく、呉服店がデパートの起源となり得たかのヒントがある。

色彩の科学的分析を根拠にして勧められる〈色の調和〉が、消費を促進する目的に奉仕していることは明らかである。色彩を調和させるためには「頭の上から足の先まで」(浜田生〔浜田四郎〕「頭の上から足の先まで」(デパートメントストアとはどんなものか)『時好』明治四〇・一一) トータルで品物を買わなくてはならないし、組み合わせを楽しむためには同じアイテムを何色も持っていないければならないからである。だが流行の経済性を主張するものや、着替えの衛生性を語るものなかにおいても、〈色の調和〉が圧倒的な説得力を持ち得たのは、むしろ衣服だけではなく、常に皮膚の色との関係で語られる、その論理にこそあった。

色は独立して美しいのと、さうでないものがあります。(中略) そこで衣服の色は、(中略) 数多の色の組合せになります。而して其色の組合せの中に、何時も組み入れられるものは、其



人の皮膚の色であります。(星常子「衣服の色合」『時好』明治三九・一)

調和と申すのは自分では訳りません、自分で衣服丈の調和は見られても、自分と衣服の調和には、いくら鏡と相談為しても出来ないのです、そこに来ますと、顧客を見るに巧みに馴れて居ります店の番頭さんなどが功労を積んで居らるゝのですから、其の見立を受けて決した方が調和した物を着る事が出来ます。(女子高等師範学校教諭吉村千鶴子談「衣服の見立」『流行』明治四一・七)

ことは〈外見〉に関わるゆえに、ア。店員に身を委ねることこそあなたが最も美しく見える方法なのだ、これらの言葉は誘惑し、装うことを受動的な作業にする。〈色の調和〉の席捲は、それが消費とファッションに受動性という折合いをつける魔法の言葉だったからに他ならない。消費を勧める言葉は〈見られる〉という異なったカテゴリーをも併呑し、完璧なまでに女性だけに向けた誘惑の言葉へと仕立て上げられるのである。

一体夫人と申すものは男子と異つて天職を持つて居るものですから、男子で出来ない個所や及ばない点に働らかなばなりません、ですから良人は外からドシ／＼御儲けに成れば夫人は夫れをドシ／＼と巧く費ふのが役です、(中略)斯く内面から慰め励まして良夫を少しでも進歩せしむるやうに致すのは、誠に必要なこと、考へますから、世の夫人がたは盛んに贅沢な服装も成さり、立派な装飾も出来ますやうに、良人を慰め励まして置いて、沢山装飾にも御費しになれば、好いでせう。(山脇房子女史談「注意すべき婦人の服装」『時好』明治四〇・一二)

しかし、確認しておくべきなのは、このようなI 的イメージを受け持つ女性は、個々の存在としてはII である、というより、III となることが求められてもいた、ということである。というのは、結局は女性一人一人が自らの欲望に従つてデパートに足を運ばなければ、物は売れない。また、ファッションが店側に強制されるお仕着せであれば、だれがそれを買いたいと自分から望むだろうか。現在から見ていかにチンプに見えようとも、消費がIV 化という変革を保証しなければ、女性の共犯を獲得はできなかつたであろう。〈色の調和〉が支配的な言説になったもう一つの理由は、女性のそれぞれを分離し、自分自身のV の主体に変えるのに大きな効力を発揮したことなのである。

着物の色は各々顔色の異なつて居るにつれて、それ／＼似合ふべき色がありますから、人が如何なる色をきて、如何に美しく見えたからと申して、自分の顔と能く相談もせず、競ふて流行の色を用ゆることは、配色の上からしても余程注意すべきこと、存じます、(某夫人談「顔と着物の配色」『流行』明治四〇・一二)

顔色が各自で違うように、衣服もそれぞれに似合うものは異なる。それを考慮せずに流行に飛びつくことの愚かさは繰り返し非難される。〈流行〉にのつとつた消費の浸透は、従来強固にあつた

階級ではなく、〈個性〉をこそ階層化のキーワードとしたのである。もちろん、改めて断わるまでもなく、人々は個性を発揮することによってのみ、消費者という均質な集団の一員になるというこ  
とである。かつてのように流行だからといってだれもが同じ服を着る時代は終わりました、今はよ  
り進化した個性の時代です、とは現在でも語られる常套句だが、イしな  
かった時代などないというべきであろう。

「三越好み」とは派手模様をいふにもあらず、又は意気向といふにもあらず、又は渋い好みと  
いふにもあらず、またはハイカラ好みといふにもあらず。只其趣味が一種他の模すべからざる  
ものあることをいふなり。(中略)されど又注意せよ。所謂三越式なる者は、事実を以て説明  
する能はずとも、今もし多数の集会あらん際に、其新装せる貴婦人連の衣裳には何となく  
意匠の似通ひたるものゝ点々たるを見、更に注意して其色合、模様、柄合、其配  
合等を見れば、著しき特殊の趣味の存在せるを認むるなるべし。(巻頭言「無署名」)「三越この  
み」『時好』明治四〇・一二)

消費の言説は、女性をひとからげにしたり、分離したりするのである。

小平麻衣子「女が女を演じる」(新曜社 2008年)

(注一) 洋服部：株式会社三越呉服店の洋服取り扱い部門を指す。前身は三井呉服店。

(注二) 三井：三井呉服店のこと。後の三越百貨店。

(注三) 正札：値引きなしの正規料金を書いて商品につけた札。

(注四) 勸工場：明治・大正時代にわたって続いた、一つの建物の中に種々の商品を陳列し、  
即売した所。現在のデパートに近い役割を果たした。

※ 問題作成にあたり、本文を一部改変した。

問1 傍線部 a～g のカタカナを漢字に直せ。解答は、解答题紙の所定欄に読みやすいはつきりした楷書体で書くこと。解答番号は  ～  。

a	ガツゼン	<input type="text" value="22"/>
b	ホンロウ	<input type="text" value="23"/>
c	シユウチャク	<input type="text" value="24"/>
d	イツソウ	<input type="text" value="25"/>
e	キヨウギ	<input type="text" value="26"/>
f	ヒンパン	<input type="text" value="27"/>
g	チンプ	<input type="text" value="28"/>

問2 空欄  ～  に入る言葉の組み合わせとして最も適当なものを、次の

①～⑨のうちから一つ選べ。解答番号は  。

①	I   受動	II   客体	III   客体	IV   客体	V   欲望
②	I   能動	II   主体	III   主体	IV   主体	V   欲望
③	I   受動	II   主体	III   主体	IV   主体	V   共犯
④	I   能動	II   客体	III   客体	IV   客体	V   共犯
⑤	I   受動	II   主体	III   客体	IV   主体	V   欲望
⑥	I   能動	II   客体	III   主体	IV   客体	V   欲望
⑦	I   受動	II   主体	III   客体	IV   主体	V   共犯
⑧	I   能動	II   客体	III   主体	IV   客体	V   共犯
⑨	I   受動	II   主体	III   主体	IV   主体	V   欲望

問3

空欄

ア

一つ選べ。解答番号は

30

に入るものとして最も適当なものを、次の①～⑧のうちから

- ① その決定権は夫人の顔色に委ねるほかない
- ② その決定権は夫人の鏡像に委ねるほかない
- ③ その決定権は己れの身体に委ねるほかない
- ④ その決定権は己れの心理に委ねるほかない
- ⑤ その主導権は夫人の良人に委ねるほかない
- ⑥ その主導権は夫人の装飾に委ねるほかない
- ⑦ その主導権は己れの外部に委ねるほかない
- ⑧ その主導権は己れの美学に委ねるほかない

問4

空欄

イ

一つ選べ。解答番号は

31

に入るものとして最も適当なものを、次の①～⑧のうちから

- ① 流行と趣味の発揮
- ② 流行と時代の進化
- ③ 流行と消費の対立
- ④ 流行と個性の両立
- ⑤ 個性と意匠の区別
- ⑥ 個性と流行の進化
- ⑦ 個性と消費の対立
- ⑧ 個性と階級の両立

問5 傍線部A「グラビアでの女性向け商品」の説明としてあてはまるものを、次の①～⑥のうちから一つ選べ。解答番号は 32。

- ① グラビアには女性向きの呉服の新柄が多く掲載されているが、P R誌の記事本文では洋服の購入を勧める男性向けだけの記事が掲載されていた。
- ② グラビアは呉服の柄だけを平面的に並べるものであり、従来の商品陳列販売方式を誌面で行っているという位置づけであった。
- ③ グラビアには、形を流行の要素として重視する洋服を当時の技術では美しく撮影・印刷できないという事情があったため、呉服が多く掲載されることになった。
- ④ グラビアは人目を惹く効果が非常に高いため、実際に販売された高価な女性の呉服だけが選ばれて掲載された。
- ⑤ グラビアには人体そのものを美しく撮影・印刷する効果があったため、呉服の柄だけではなく着用イメージも必ず掲載されていた。
- ⑥ グラビアは従来、女性向きの呉服の柄を平面的に並べただけであったが、三越呉服店の洋服部再開後は、女性用洋服紹介の記事が増えた。

問6 傍線部B「P R誌にみられる女性と呉服との縁」の説明として最も適当なものを、次の①～⑥のうちから一つ選べ。解答番号は 33。

- ① P R誌の刊行当初から、雑誌には消費者としての女性が描かれており、女性と呉服との関係は長期間にわたって続いているということ。
- ② P R誌に登場する女性像は、呉服を仕立てる労働は女性の仕事であるという当時の実態を反映したものであるということ。
- ③ P R誌の小説や記事には、上流階級の女性が高価な呉服を購入する様子が描かれており、女性の購買意欲をかき立てるものであったということ。
- ④ P R誌の創刊が日露戦時下であったことから、裁縫の仕事をしながら出征した夫の留守を守る女性の姿が、グラビアには掲載されていたということ。
- ⑤ P R誌の発行機関である呉服店はデパートの起源であり、そこでは女性向きの商売が行われていたという長い歴史があるということ。
- ⑥ P R誌の小説や記事に女性が多く登場するのは、自分で代金を支払うかどうかに関係なく、実際に店舗を訪れるのが女性だったからという事実があるということ。



問7 傍線部C「女性と消費の結びつき」の経緯の説明として最も適当なものを、次の①～⑥のうちから一つ選べ。解答番号は 34。

- ① 明治四〇年に、男性が外で儲けて、女性は贅沢な服装や立派な装飾をすることで消費活動に励むべきだとする山脇房子氏の意見が発表されたことを受けて、当時の女性が自らの欲望に従ってデパートに足を運ぶようになった。
- ② デパートの販売戦略が、従来の商品陳列販売方式から、店員が客の衣服を見立てたうえで商品を勧める〈客の身になる〉サービスへと転換した結果、女性客が安心して商品を選び、自分の意志で買い物を決断することができるようになった。
- ③ ファッションで〈色の調和〉が意識されるようになると、女性客は自身の皮膚の色と衣服の調和がとれた、自分が最も美しく見える組み合わせを店員に判断してもらうため、デパートへ足を運ぶようになった。
- ④ デパートの前身である呉服店は、三井呉服店のように上流階級の女性を対象としていたが、時代とともに、消費は階級に関係なく、だれにでも許されているというイメージが浸透したことをうけて、消費者としての女性像が登場した。
- ⑤ 色彩を調和させるために全身トータルで衣服をそろえることや、色の組み合わせを楽しむために色違いでアイテムを購入することが、女性を最も美しく見せる方法であるとデパートが宣伝したことによって、女性が欲望のままに消費するようになった。
- ⑥ 呉服店のPR誌に掲載される女性は、特に雑誌刊行初期や日露戦時下においては、当時女性が担っていた裁縫という労働との結びつきが強かったが、時代とともに、女性が実際に買物をする機会が増えたことをうけて、消費者としての側面が強くなった。

問8 傍線部D「呉服店がデパートの起源となり得たかのヒント」の説明として最も適当なものを、次の①～⑥のうちから一つ選べ。解答番号は 35。

- ① 色彩の科学的分析に基づいて提案される〈色の調和〉は、客の皮膚の色も含めて店員が判断する必要がある、それは呉服店で行われていたことから示唆される。
- ② ファッションとは美意識にかかわる行動様式を指す語であり、その行動様式に一致する商品やサービスが扱われていたのが呉服店であった。
- ③ 呉服店がPR誌のグラビアに呉服の新柄を多数掲載していたという経緯から、女性がファッションにおける〈色の調和〉を意識するようになった。
- ④ さまざまな擬似科学的言説に基づいて、流行にのっとった衣服を着用することが勧められていたが、その言説は呉服店に由来するものであった。
- ⑤ 商品の購入場所としては商品陳列販売方式の勤工場があったが、客は呉服店で行われていたような、店員と価格交渉しながら購入商品を決める方式を求めている。
- ⑥ 女性は常に〈見られる〉ことを意識しているため、店員による適切な見立てが行われる呉服店でこそ、安心して商品を購入することができた。

問9 傍線部E「ひとからげ」と結びつき慣用表現になるものとして最も適当なものを、次の①～⑨のうちから一つ選べ。解答番号は 36。

- ① 十葉
- ② 十円
- ③ 十目
- ④ 十全
- ⑤ 十把
- ⑥ 十能
- ⑦ 十徳
- ⑧ 十善
- ⑨ 十握とつか

問10

本文の内容に合致するものを、次の①～⑨のうちから二つ、選べ。ただし、二つとも正解しなければ点を与えない。解答の順序は問わない。解答番号は

37

38

- ① ファッションと女性とを結びつける消費の領域に〈色の調和〉が登場したのは、客が店員に干渉されることなく自身の肌の色にあった商品を選ぶことで、自分で買いたいと望んだ物を自由に買えるという欲望を満たすことができたからである。
- ② 〈流行〉にのっとったファッションではだれもが同じ服を着ているように見えるが、人々はそれぞれに似合う衣服を選ぶことで〈個性〉を発揮しており、また、そのことによって消費者という集団に加わっている。
- ③ デパート文化の主役とされる女性のイメージは、創業当初から現在に至るまで一貫して消費者としての女性であるが、その消費活動を支えたのは女性向きの呉服の新柄を多数掲載していた呉服店のPR誌であった。
- ④ デパートは、前身である呉服店の販売方式を引き継ぎ、女性向きの商品を陳列する販売方式と、現金正札を付けることで金額を提示する方式を採用し、客が店員と値段の交渉をすることなく、安心して購入できるような戦略で経営に成功した。
- ⑤ ファッションにおける〈色の調和〉は色彩の科学的分析を根拠にして勧められるものであったため、それまでの擬似科学的言説に基づく流行よりも説得力があり、男性支配的な社会のなかで自身をより美しく見せたい女性たちの支持を得ることができた。
- ⑥ 泉鏡花が述べた、全く客のためを思わないデパート店員の接客への不満をうけて、デパートでは、客が店員に干渉されずに商品を眺めることができる商品陳列販売方式へとサービスを転換させた。
- ⑦ 〈色の調和〉が流行するようになったとはいえ、顔色や皮膚の色が各自で違うようにそれぞれに似合う衣服も異なるため、流行色を用いた商品に飛びつくことは愚かなことだと気付いた消費者は、現在では〈個性〉を重視するようになった。
- ⑧ 女性が自らの欲望に従ってデパートに足を運ぶようになった背景には、もともと男性中心社会において〈見られる〉存在であった女性の立場と、〈色の調和〉がファッションで意識されるようになり、店員からの客観的な見立てが必要になったという経緯がある。
- ⑨ デパートが〈色の調和〉というキーワードによって、全身トータルで品物を選ぶ必要性、同じアイテムを何色もつ楽しさ、皮膚の色との組み合わせによる個性の発揮といった誘惑を女性だけに向けたことによって、従来男性に支配されてきた女性の自立につながった。

問11 本文の表題として最も適当なものを、次の①～⑧のうちから一つ選べ。解答番号は

39

- ① 三越のすすめ
- ② 顔と着物の配色
- ③ 自分らしさをもとめて
- ④ デパートがふりまく媚び
- ⑤ 〈流行〉と〈個性〉の対立
- ⑥ 〈消費者〉というジェンダー
- ⑦ 〈見る〉ことと〈見られる〉こと
- ⑧ 〈見るだけ〉から〈買いたい〉へ